

ペンの権能と不安 : 「作家」 Charles Brockden Brownと文学市場

須藤, 祐二

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

53

(終了ページ / End Page)

71

(発行年 / Year)

2011-01-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007088>

ペンの権能と不安

—「作家」 Charles Brockden Brown と文学市場

須藤 祐二

1. 序

19世紀への転換期におけるアメリカにおいて、その文学の特徴は、植民地時代から引き継いだ「社会政治学的批評」(Rice 9)の影響を色濃く残している点にある。その論調は、文学が社会体の安定と道徳の向上に資するべきという枠組みを持ち、1830年代に至るまで主流であり続けた。そして、この論調を主に支えたメディアが批評雑誌であった。

William Charvat が「概して、批評が義務と感じていたのは、政治的、経済的、道徳的现状を乱そうとするあらゆる作家をおさえつけることであった」(7)と指摘するように、この当時、批評雑誌は、「アメリカ国民」の内面をいかに修養／訓育していくかという文化的使命を自らに課していた。のちに「アメリカ小説の父」と呼ばれ、ゴシック作家であった Charles Brockden Brown (1771-1810)も、*Monthly Magazine, and American Review* や *Literary Magazine, and American Register* の編集者として、このような議論に身を投じた人物である。批評雑誌に見られる彼の言説は、社会的要請に沿って、読書の功利的利用の必要性を展開している。

Our hearts should learn to sympathize; and we should consult the annals of history as a son and a brother would turn over his domestic memoirs. We should read history, not to indulge the frivolous inquisitiveness of a dull antiquary, but to explore the causes of the misery and prosperity of our country. We ought to be more interested in the progress of the human mind than in that of empires. (*LER* 159)

歴史を読むことは、直接、「我々の国家の悲惨さや繁栄の原因を探る」ことと組み合わされる。このことによって、読書は公共空間の管理に資することと連結される。この読書スタイルは、スコットランドから輸入された常識哲学を下敷きにしつつ、「共感すること」という極めて狭い個人的領野で展開される。David Hume (1771-1776) への反駁から生じたこの保守思想は、Thomas Reid (1710-1796) や Adam Smith (1723-1790) らを代表者として、全ての人間には生得的な道徳感情——共感——があると想定し、この共通した感情を担保として、経済・社会体の安定が果されるのだと論じる。

感情を公共空間の安定の資本として供する時代において、ブラウンもまた批評雑誌で保守的論調を展開し、その批判対象をゴシック小説にまで拡げている。

Amusement it therefore must be, and certainly is amusement of a very singular kind, such as appears to me to be very incompatible with tenderness of frame, or purity of mind. What should we think, if a lady, who had the command of an extensive library, should ransack the indexes, and reject every page but that which contained an account of a murder? A question then very naturally arises. Why are works entirely composed of murders considered as most certain of being perused? The answer to this question I shall leave to my readers, and content myself with hoping that the present fashion, like all departures from nature and common sense, will have a short reign. (LER 181)

この論説で注目すべきは、ここにおいても、ブラウンが常識哲学の用語法——人間内部に共通すると想定されている「コモン・センス」——に頼っていることである。ブラウンはゴシック小説を読みあさる女性たちに不安をいだきつつ、「現在の流儀が短期間しか君臨しない」ことを望む⁽¹⁾。

一方、このような保守的論調とは対照的に、編集者へと転身する前に彼が発表したゴシック小説——*Wieland; or, The Transformation: An American Tale* (1798), *Ormond; or, the Secret Witness* (1799), *Arthur Mervyn; or, Memoirs of the Year 1793* (1799), *Edgar Huntly; or, Memoirs of a Sleep Walker* (1799)——が、彼をアメリカ建国期の重要な作家へと押し上げたこと

も事実である。『ウィーランド』では狂気ともとれる信仰によって妻子に手をかける男 Theodore Wieland の行動と、兄の凶行から逃れる妹 Clara Wieland の恐怖が描かれる。第二作『オーモンド』では黄熱病と詐欺の渦まく社会で、女性主人公 Constantia Dudley がいかに経済的苦境を抜け出したかが提示される。この小説は当時流行していた扇情小説の流れをくみつつ、クライマックスで、ユートピア論者であり詐欺師でもある Ormond の暴行未遂を描き出す。『アーサー・マーヴィン』は、詐欺師 Thomas Welbeck の片棒を担ぎそうになる若者 Arthur Mervyn が、ウェルベックの企みを見抜き、医師 Stevens に保護されて清廉な若者として独り立ちする過程を描く。マーヴィンは最終的に裕福な末亡人と結婚することで経済的安定を獲得する。最後の小説『エドガー・ハントリー』では、夢遊病を発症し、「インディアン」を次々に殺していく主人公の変遷を通して、白人男性社会にひそむ偽善を暴き出す。このように、ブラウンのゴシック小説は、殺人、狂気、詐欺、変装、無意識など、彼自身が批評雑誌で批判をした扇情的描写に満ちているといえる。

ゴシック作家としてのブラウンと批評雑誌におけるブラウン。この首尾一貫性を欠いた態度を検証するためには、後述するように、作家としてのペンの権能とペンによって文字化される自己という視点の導入が必要になる。この視点は、この二人のブラウンの底に存在する「作家」の定義への不安、さらにはペンの権能へむけられた不安を可視化することになるであろう。

ブラウンは「本のみが連続的データの連続的ストレージを提供できた」(Kittler *DN* 116) 時代に生きた。この目立たないが重要な前提を考慮にいれつつ、本論は、『ウィーランド』と『アーサー・マーヴィン』を中心に据え、語り手がテキストと織りなす対照的な関係に焦点を当てる。『ウィーランド』は語り手とテキストの一見不可分に絡み合った関係に最後に留保をつける。一方、『アーサー・マーヴィン』は、文字テキストが必然的に有する表象上の限界を通して、活字テキストの絶対性に疑問を投げかける。これらのテキストの考察によって明らかになるのは、活字が独占的メディアとして君臨する時代において、そのメディア自体を十全に活用しつつ、同時に、その力を制御できるのかというブラウンの不安である。編集者ブラウンと作家ブラウンとの間の首尾一貫性の欠如の下には、彼の文学テキストにすでに書き込まれていた、ペンの権能の追求と、そのペンの力によって自分自身が取り込まれるのではないかという不安が共通して存在する。

2. ペンの権能とその留保

『ウィーランド』の冒頭は、「あなたのご要請にお応えするのは、すこし気が進みません」(5) というクララの言葉から始まる。この小説は二通の手紙からなっており、26章にもおよぶ最初の長い手紙はクララの絶望感で満ちている。クララは兄の狂気と自殺を目撃した後、伯父 Cambridge の要請を断り、その悲劇の起こった屋敷にこもって手紙を書く。その手紙はこの悲劇を山場とする回想になっているが、彼女はその最初で「未来は私の思考に何ら力をもたないのです」(5) といい、終盤では「ペンを置いたとき、私の命は消え去るでしょう。私の存在は私の話と共に消え去るのです」(221) と宣言する。物事の始まりから終わりに至る統一的道のりは、その行程をクララ自身の存亡と重ね合わせる。

I will persist to the end. My narrative may be invaded by inaccuracy and confusion; but if I live no longer, I will, at least, live to complete it. What but ambiguities, abruptnesses, and dark transitions, can be expected from the historian who is, at the same time, the sufferer of these disasters? (147)

クララは自分を襲った悲惨な出来事から距離を取ることができない。しかし、彼女は悲劇の人物として過去を経験しただけでなく、その過去を書簡として組み立てようとする。Gary Saul Morson の以下の物語論研究が示すように、こうした行為で描かれる過去は実際の過去ではない。

It[narrative] violates the continuity of experience by imposing a beginning and an ending; it reduces the plurality of wills and purposes to a single pattern; it makes everything fit, whereas in life there are always loose ends; and it closes down time by conferring a spurious sense of inevitability on the sequence actually realized. The very possibility of possibility is ultimately eliminated. (38-39)

クララの過去は書かれた過去としての側面を強調し、無機質な時間が人間的時間へと変質するメカニズムを示す。「書くことは、もはや記憶補助ではなく、記憶そのものとなった」(Stiegler 61) という状況、つまり、書くことが記憶の外延そのものとなる状況がここで生まれる。クララは、過去を書くことで、過去をもう一度生きることになる。

「ペンを置いたとき、私の命は消え去るでしょう。私の存在は私の話と共に消え去るのです」という宣言によって、この書簡は、過去の行程、書くことの終焉、自己存在の消失が互いに重なりあい、それぞれの終了が互いの終わりに直結することを暗示する。ここに見られるのは、書記言語による意識の独占支配の極地である。Friedrich A. Kittler が指摘するように、蓄音機、映画、タイプライターなどの近代メディアが視覚、聴覚、触覚の分裂と意識構成上で分業をもたらす以前には、書記言語が唯一の独占的メディアとして君臨した。その時代は、書記言語が人間意識に連続的枠組みを保証した時代であり、「言葉によってすでにずっと囚われている人々」(Kittler *L.M.I.S.* 90) の時代であった。

As long as the book was responsible for all serial data flows, words quivered with sensuality and memory. It was the passion of all reading to hallucinate meaning between lines and letters: the visible and audible world of Romantic poetics. And the passion of all writing was (in the words of E. T. A. Hoffmann) the poet's desire to "describe" the hallucinated "picture in one's mind with all its vivid colors, the light and the shade," in order to "strike [the] gentle reader like an electric shock." (Kittler *GFT* 10)

この時代の作家にとって、書かれた言葉の理想とは、意識上に幻想を直接的に生じさせるメディアになることであった。同時代を生きたブラウンは、クララに自分のペンで過去を構築させる。そうすることで、クララは陰鬱な絵を自分の精神に描いていくことになる。Norman S. Grabo が *The Coincidental Art of Charles Brockden Brown* で「ブラウンの虚構の世界は閉じられ、運命づけられた世界である」(166) と言うように、その絵はクララに、書簡の終りが自己存在の消失でもあることをあたかも運命として提示する。彼女の書簡がもた

らず「偽の必然性の感覚」は、彼女の過去だけでなく、彼女の未来にまで拡大する。クララの宣言が示すように、彼女の未来は閉じたものとして言葉と共に現出し、彼女は手紙の中に自分を死へと誘い込む自分自身の声を聞くことになる。

この言葉と自己をめぐる極端なつながりは、クララがペンを置いた後、屋敷が燃え落ちることによって完成する。このプロットを考察する時、この屋敷に Marcus Tullius Cicero の胸像が置いてあることは注目すべきことである。建国期のアメリカにおいて、キケロは「良き市民としての学生をつくるという要望に根付いたキケロ的なヒューマニズム」(Court 21) の象徴であり、その弁論術と道徳性の導入が大学をはじめ社会全体の教育モデルとされた。『ウィーランド』の前半において、メッティンゲンの屋敷は、才気あふれる若者たちが哲学的会話を交わす舞台であったが、キケロの胸像の存在によって、この屋敷は当時のアメリカの教育モデルと重なり合うことになる。しかしながら、キケロが同時にストア倫理学の哲学者として独特の宇宙観を持っていたことも忘れるべきではない。Academica 第2巻での彼の終末予言、つまり、「この世のすべてが熱と共に焼失する時が来るであろう」(621) というストア派の宇宙観は、見事にクララの予言と重なることになる。

クララは閉じられた時間のなかでペンと共に存在する。そのペンを置くことは自分自身の存在の終焉でもあると彼女は言う。しかしながら、この書記言語と意識の構築の極端な連携は、三年後に書かれたとされる二通目の書簡が差し込まれることで、失敗に終わる。最終章は、「私は永遠にペンを置いたものと思っていました」(234) という言葉から始まるが、そこでクララは、死を待ち望んでいた自分自身を次のように回想している。

Great as my calamity was, to be torn from this asylum was regarded by me as an aggravation of it. By a perverse constitution of mind, he [Cambridge] was considered as my greatest enemy who sought to withdraw me from a scene which supplied eternal food to my melancholy, and kept my despair from languishing. (235)

当時のクララにとって、悲劇の舞台であった屋敷は「避難場所」でもあった。しかし、見方を変えれば、その場所は、言葉がクララをパラノイア的心象へと

追い込んでいくという意味で、精神病理的な意味合い——「精神病棟」——も帯びることになる。そこは「憂鬱に永遠の食物」を与えてくれる場として、時間が停滞する場所である。そしてこの停滞は屋敷が火災で崩壊するまで続くはずであった。

しかし彼女は屋敷から救出されてしまう。この救出により、クララは伯父とヨーロッパに渡った末、秘かに恋心をよせていた Pleyel と結婚をすることになる。かつて「未来は私の思考に何ら力を及ぼさない」と宣言したクララは、火災からの救出について次のように述べる。

This incident, disastrous it may at first seem, had, in reality, a beneficial effect upon my feelings. I was, in some degree, roused from the stupor which had seized my faculties. The monotonous and gloomy series of my thoughts was broken.... A new train of images, disconnected with the fate of my family, forced itself on my attention, and a belief insensibly sprung up, that tranquility, if not happiness, was still within my reach. (237)

「変化のない陰気な一連の思考」から「一連の新たな像の連なり」への変化、これによって、クララは自己消滅へと向かう時間形態から切り離される。「ブラウンにとって明らかに後付けになっているこの章は、(その章がなくても)十分に良いものを残したと考えたい、彼を称賛する人々を悩ませてきた」(120)と Bernard Rosenthal が言うように、『ウィーランド』発表当時から現在まで不評の元となっていた⁽²⁾。しかし、ペンと記憶と存在の三者の関係を考慮にいった時、この二通目の手紙が二重の時間に囚われたクララの存在に留保をつけることは明らかである。『ウィーランド』はクララを生き延びさせることで、彼女が囚われていたペンと過去の共謀を前景化する。ペンがクララに想定させた運命が虚像だったというわけではない。伯父に救出されなければ、書くことの終わり、過去の終結、クララの存在の終焉が、屋敷の焼失と全て重なり合っていた。ペンは死に至る道程を実体化する力を有していたのである。書記言語が独占的メディアとして機能した時代のテキストにふさわしく、ペンの力がこのテキストには十全に示されている。しかし、問題は、ブラウンがこの留保によってひとりの語り手／書き手を救ったことにある。ブラウンが作家の権能の

源であるペンの力をどのように引き受けつつ、どのような不安を抱えていたか、この問題は、『ウィーランド』と対照的な方法でペンの力を描いた『アーサー・マーヴィン』の考察によってより明らかになる。

3. 内実の欠如

『アーサー・マーヴィン』で常に問題になるのは、「戦略的変身と自己欺瞞の倫理」(Christophersen 54)であり、はたして、主人公マーヴィンは本当に清廉な人物なのかという疑念の処理である。この若者は、農村から都会であるフィラデルフィアに出て、悪漢ウェルベックの片棒を担ぎそうになる。しかし、マーヴィンは、その企てを阻止し、ついには医師スティーヴンスをはじめ、周囲の人々の信頼を勝ち取る。そして、裕福な未亡人 Achsa Fielding と結婚に至る場面でこの書簡体小説は終わりを迎える。最終的にマーヴィンは清廉な若者として描かれる。しかし、回想形式で進むこの物語には、マーヴィンの実直さを切り崩す言説がいくつも埋め込まれている。彼を幼いときから知る Althorpe や近隣の人々は、彼が怠惰であり、果ては父の再婚相手と関係をもって家にいられなくなったと述べる。また、マーヴィンはたびたび許可なく他人の家に入り込み、性急で思慮に欠けた行動を見せる。そして彼はしばしば自分の経済的利益を最優先するような行動を取る。例えば、彼は「金銭上の役得は取るに足らない忌むべきものだ」(342)と述べる。しかし一方で、自分が一時身を寄せた Hadwin 家が娘の Eliza を残して死に絶えると、彼はイライザとの結婚生活を考え始める。この試みは、マーヴィンによる財産権の掌握を意味しており、同時に彼の経済的成功を意味している。しかし、イライザの財産相続が叔父に阻止されると、彼は彼女を捨てる。そして彼は裕福な未亡人アクサと結婚することで、この小説は終結を迎えることになる。

19世紀への転換期において、アメリカは合衆国銀行の設立など、工業化と信用経済に基づく近代資本主義社会の黎明期を迎えていた。それは、同時に、北部を中心とした工業化が、移民と農村からの移住者を盛んに労働力として受け入れた時期でもあった。David Waldstreicher が「18世紀後期において、アイデンティティはますます不安定なものになった。とても流動的な人々、特に都市部の若い男性たちは、外見を操ることで、自分自身を作り、そして作り直すことができると気づいた」(78)と指摘するように、こうした流動的な都

市住民によって、不安定な自己像という副産物が生まれることになる。そして、この副産物こそが、他者の視線への訴えと関係づけられて、『アーサー・マーヴィン』で盛んに提示される問いとなる。

ウェルベックに服をあてがわれた時、マーヴィンは「外見は服装によって驚くほど影響される」(51)と述べ、対他関係における外見の重要性に気付く。そして、物語が進むにつれて、こうした「様相」(appearance)の重要性は物理的な姿から、さまざまな言説によるイメージへと拡大する。この若者は物語中で様々な変化をみせて清廉な自己像の流通を試みる。物語の後半で、マーヴィンは彼の批判者である Wentworth に「様々な様相が私にとって不都合なものになっている。しかし、それらの様相は偽物だ」(355)と必死に弁解する。マーヴィンによれば、知人達の言説は「私の名前で通用している亡霊であり、それは人々の想像力の中でのみ存在している」(340)。様々な遍歴や行動から生じる疑念に、マーヴィンは「人は眼で見たものから判断を下すべきです」(340)と反論し、語り手であり彼の擁護者であるスティーヴンスの信頼を得ようとする。結局この訴えはマーヴィンが最後に見せた善行に支えられて周囲の人々に受け入れられる。

清廉な自己像の流通を試みる際、彼は自分に備わったもうひとつの強力な武器に頼る。それは他者をひきつける「めったにない男らしい美しさ」(6)をたたえた顔つきであり、スティーヴンスは別のところでこの若者の容貌がもつ不可思議な力に言及している。

Had I heard Mervyn's story from another, or read it in a book, I might, perhaps, have found it possible to suspect the truth; but, as long as the impression, made by his tones, gestures and looks, remained in my memory, this suspicion was impossible. Wickedness may sometimes be ambiguous, its mask may puzzle the observer; our judgment may be made to falter and fluctuate, but the face of Mervyn is the index of an honest mind. (229-230)

スティーヴンスは自分が欺かれるかもしれないことを知っている。しかし彼は、「正直な心の指針である」マーヴィンの顔に自分の信頼をかける。Teresa A. Godduによれば、因果関係の解明に重きを置く『アーサー・マーヴィン』の

言説は、啓蒙のレトリックに依拠しているように見えて、実は無条件の信頼という非啓蒙的な受け入れを求めている(31-51)。また、Elizabeth Jane Wall Hindsは、このマーヴィンの信頼の要請が、「初期(および後期)資本主義において作用した投機の原理」(72)と同じ条件に従っていることを指摘している。知人たちの間に現れる狡猾な様相をした彼の「亡霊」は、結局、能弁と外見に基づいた他者の信頼の前で消散してしまう。

ここに、『アーサー・マーヴィン』の最も決定的な欠落が見られる。この欠落に着目している研究の中でも、“Historical Essays”におけるグラボーの言及が、その欠落を最も簡潔に示しているであろう。

Whereas Stevens could soothe his anxieties [about Mervyn's fairness] by recalling that “the face of Mervyn is the index of an honest mind,” we do not have that face before us to support our confidence. For us Mervyn is only his story. (Grabo 475)

このテキストの読者には、人好きのするマーヴィンの表情は与えられない。「人は眼で見たものから判断を下すべきです」というこの若者の訴えは、読者の置かれた立場をあざ笑う。マーヴィンによる自己弁護は、周囲の人々からの信頼と不信に迎えられ、その間を揺れ動くが、これは読者の疑念をより深刻化させることになる。

マーヴィンが自分の周囲に人好きのする自己像を流通させていく過程で最も重要なことは、この自己像の流通が、テキストの構成それ自体にまで拡大されていくことである。

Mrs. Wentworth has put me upon a strange task.... I have, oftener than once, and far more circumstancially than now, told her my adventures, but she is not satisfied. She wants a written narrative....

Luckily my friend Stevens has saved me more than half the trouble. He has done me the favor to compile much of my history with his own hand. (412)

この物語は枠組みとなるふたりの人物によって支えられている。ひとりとは黄熱

病にかかったマーヴィンを救い出し、マーヴィンからウェルベックとの対決を見聞きする医師スティヴンスである。このスティヴンスによるとされるテキストは物語のおよそ四分の三を占める。もうひとりの執筆者はマーヴィン自身であり、彼の回想はウェルベックによって引き起こされた混乱の修正を描き、やがてアクサとの婚約の場面へと至る。この二つの物語は分断を抱えているが、ブラウンが序文で「ひとつのささやかな物語を織ること」(3)と述べるように、細部までプロット化され、困窮した若者マーヴィンの成功への道をまとめ上げる。語り手／書き手のマーヴィンにとって、ペンは生存をかけた武器となる。「ペンは鎮静剤である。ペンは精神の経路を照合し、精神の放浪を制限する。それは跡をたどり、我々はそれによってひとつの道に固着せざるを得なくなる」(414)と彼は語る。マーヴィンにとって、ペンへの依拠は自分だけの閉じた領域を確保するために必要不可欠なものになっている。

『アーサー・マーヴィン』はマーヴィンの言語的な外見として機能している。キットラーはメディアの近代化以前において、「アルファベットで文字化された個人は、このインクと文字の連続的な流れの中に「外見と外面性」を有する」(GFT 9)と述べた。興味深い偶然の一致ではあるが、キットラーもここで「外見」(appearance)という言葉を使用している。「人は眼で見たものから判断を下すべきです」と訴えるマーヴィンは、まさに、データの唯一の連続的ストレージであった文字の連なりを、自分自身の外見として読者の眼前に提示する。『アーサー・マーヴィン』はマーヴィンの外見であり、アーサー・マーヴィンと『アーサー・マーヴィン』との関係は、まさに、この文字化された個人がもつ表象上の特徴と限界を見事に集約することになる。

マーヴィンとスティヴンスの結合テキストには、ウェルベックらの発話、手紙、伝聞が何重にも入れ子式に組み込まれ、その複雑さは悪名高い。しかしこの混乱は、『ウィーランド』や『エドガー・ハントリー』などと同じく、「舞台」や「劇場」への言及がひとつのまとまりを指向することで、巧妙に制御される⁽⁴⁾。

このテアトラム・ムンディ——世界劇場——の技法は、繰り広げられる様ざまな出来事をひとつの有機的まとまりとして提示することを可能にする。後半の冒頭でスティヴンスは、「マーヴィンは予感や経験など、詐欺に対する防備策を身につけることなく舞台上がってしまった」(219)と述べる。一方で、ウェルベックはマーヴィンとの対決で「忌むべき愚者め！ 貴様こそが自分で

描いた場面の著者、名もなき無数の恐怖の著者ではないか」(337)と叫び、死んでゆく。同様にアクサへの告白の場面でも「舞台」や「劇場」への言及がなされることを見落とすべきではない。告白が受け入れられるか迷うマーヴィンにスティーヴンスは次のように言う。

This is the necessary part of the drama. A joyous certainty, on these occasions, must always be preceded by suspenses and doubts, and the close will be joyous in proportion as the preludes are excruciating.... Time and a few more interviews with Mrs. Fielding will, I doubt not, set all to rights. (626-7)

スティーヴンスは告白の逡巡が「戯曲の必要な一部だ」と述べ、マーヴィンを送り出す。そしてマーヴィンは、木々に囲まれたベンチを告白の場面として選び、「私はこれを私の運命の締めくくりの場面となるよう計画した」(441)と回想する。テキストとしての『アーサー・マーヴィン』は、結婚へと至る道程を時間的なまとまりとして提示する。それはひとつの舞台として練り上げられた存在論的に閉じた時空となり、同時にパフォーマンスな演技性を強調する客観的視座を与えることにもなる。この擬似空間で読者が目撃するものは、マーヴィンが言語という外見に頼りつつ、自己像の構築を試みている様である。その構築過程は自己像への無条件の信頼を要求する。言い換えれば、インクの染みという外面性の彼岸を一切保証せず、それを無条件に受け入れることを要求することになる。言語構築物である『アーサー・マーヴィン』は、それ自体が亡霊であるといえる。その亡霊はマーヴィンのペンと共に現れる。

『アーサー・マーヴィン』が映し出すマーヴィンの像が語り手マーヴィンと相同的なものかどうかは確かめようがない。むしろ、様々な言説がパッチワーク状に折り重なることによって、清廉な自己像を支える実体の欠如が否応なく強調される。このテキストは、ペンが内実と外見の一致を保証しないことを肯定する。そして、ここから生じる計りがたさこそが、マーヴィンの像を亡霊として支えることになる。この外面性の浮揚は、『ウィーランド』における書くことの終わりとして自己消失の重なりに対して、まさにもうひとつの極地を形成することになる。内実を保証しないテキストへの無条件の信頼をあえて前景化することで、ブラウンはテキストのパフォーマンスな次元を強調する。この試

みは、活字が実体的な力を持っていると想定された時代において、このメディアから幻想を直観視しようとする人々をあざ笑う。すでに引用したマーヴィン自身の言葉をもう一度借りれば、その亡霊は「私の名前で通用している亡霊であり、それは人々の想像力の中でのみ存在している」といえる。亡霊は想像力の中に潜む。言葉の中にはない。ペンは閉じた世界を創り出す権能を有するが、しかし、ペンと亡霊は直接つながることなく、その源を読み手の想像力へと預けそうとする。それゆえ、その像はわずかな疑念で消散してしまう不安定なものとなっている。

4. 書き込まれていた欲望と不安

ブラウンの小説はゆるやかな書簡体小説となっている。彼の物語は「書簡を書く」という行為をその物語内容の重要な要素として含み、そこでは、『ウィーランド』や『アーサー・マーヴィン』に見られるように、ペンと自己意識との関係性が問題となる。物語の遂行とペンの権能が相互関連しながら、結果として、クララの病的な人格やマーヴィンの捉えどころのない人格の成立が果されることになる。そうした人格は書記言語という技術によって適及的に形成されている。「外在化以前には存在しない性質を外在化させるというパラドックス」(Stigler 157) が、これらの書簡の書き手と彼らの書簡の関係に表れることになる。

ブラウンの物語にはペンに対するアンビバレントな態度が存在する。『ウィーランド』では、ペンによって文字化される個人が描かれる世界と密着する。この絡み合いは伯父による救出という外部的な力がなければ、消失の共有を見たであろう。ペンは幻想に実体的な力を持たせる。しかし、ブラウンはこうした危険な幻想から書簡の書き手、クララを救い出す。ペンの権能から書き手を引き離すことによって、ブラウンはペンが文字化された人間に対して持つ力を肯定しつつも、その力に留保をつける。一方で、この留保は『アーサー・マーヴィン』では逆転する。読者にとって亡霊としてしか存在しないマーヴィンの姿は、あえてペンによる表象の限界を明らかにする。しかし、逆説的に、その限界は、内実の保証なき世界の創造というペン独特の権能を書き手に与えることでもある。

ブラウンは、クララを救い、マーヴィンの姿をその内実を保証することなく

表出させる。しかし同時に、この著者としての選択と力の裏には、ペンの権能が作家としての自分自身を捕えるのではないかという不安が存在している。その不安は、クララが自分の言葉に囚われる様に明瞭に表される。同時に、内実の保証を執拗に拒むマーヴィンの言語戦略もその不安を逆説的に強調することになる。

ブラウンは1800年の『エドガー・ハントリー』出版以降、小説執筆から徐々に離れ、批評雑誌の編集に力を注いだ。アメリカを「世界のどの国よりも印刷出版物の巨大な市場だ」(LER 183)と評したのはブラウンだが、この市場の出現は旧来の作家像に大きな変化をもたらした。それは、文学的な経済活動を行うことが、作家の内的な一貫性を切り崩しはしないかというジレンマであった (Rice 79-81)。

The change in the status of authorship from political to economic act contributed to the struggles encountered by authors like Charles Brockden Brown who aimed to be “moral painters” and speak “truths,” but who, at the same time, needed to make money to survive. (Slawinski 5)

スラウィンスキが上記で論じている苦闘のなかで、ブラウンは、市場に対して、市民的義務に奉仕する作家兼編集者としての証をたてる必要に迫られる。そしてブラウンは批評雑誌で、作家は市民的義務に資するべきという保守的な論調を選択する。彼は「我々の心は共感することを学ばなければいけない」と主張し、功利主義的読書の必要性を説く。同時に、彼はゴシック小説の煽情的描写を批判する。道徳を説く作家という点で、彼は旧来の新古典主義的モデルにそった振る舞いを批評雑誌で見せている。この批評雑誌での振る舞いは、ゴシック作家としてのブラウンとの軋轢を生み、その調停が多くの研究で困難であるとされてきた⁽⁴⁾。しかし、視点を変え、ペンの権能と自己構築という観点からみると、ゴシック作家と批評雑誌でのブラウンの振る舞いには共通点が浮かんでくることが分かる。

批評雑誌において、ブラウンは新古典主義的な枠組みに沿って自分自身を陶冶する。彼は紳士的な知識人として振る舞う。その目的は拡大してゆく文学市場の道徳的統制におかれ、その枠組みでは作家は社会体の安定のために書くべ

きだという論陣が張られる。ここには、批評家としてペンの権能を信じるブラウンが存在する。ペンは実体的な力をもつことを目指す。しかし、そうした評論がブラウンの署名を伴わない匿名の投稿であり、署名があったとしても投稿者としての自分を名乗らずに“X”などの署名で済ます戦略がとられていたことを忘れるべきではない。ペンの力によって、ブラウンは文学市場という文字の世界で生きようとする。しかし同時に、ブラウンはペンの権能によって自らが縛られることを拒絶する。ブラウンの偽名の使用は、「作家ブラウン」として文字化されている自分自身との間に矛盾が生じることへの恐れを表す。クララが過去を基にした言葉に囚われたように、「作家ブラウン」の過去が批評家兼編集者としてのブラウンの振る舞いに制約をもたらす。マーヴィンの外見がその内実を保証せずに漂い続けたのと同じように、こうした擬似投稿はブラウン個人へと回収されることなく漂いつつ、批評雑誌の体裁を整えることに成功する。批評家ブラウンのペンの使用は、文学市場での振る舞いを意識したパフォーマンス的な行為になっている。しかし、それは空虚なものではなく、ゴシック作家ブラウンと編集者ブラウンの調停という実質的な策となる。そして、この二人のブラウンの調停を目指した言語戦略が、『ウィーランド』や『アーサー・マーヴィン』にすでに極端な形で書きこまれていたことを見逃すべきではない。ブラウンの実際の手紙を見てみると、彼が「巨大な市場」の存在を意識していることが分かる。

Proposals have been issued here for the publication of a Monthly Magazine, of which I am to be the editor, and whose profits are to belong to me. The uncommon zeal of my friends here promises success to this project. If it answer[s] expectation, it will commence in February or March. This scheme, if it answer[s] in any tolerable manner, will be very profitable. (Dunlap 201)

1798年12月20日のこの手紙に見られるように、ブラウンの市民的義務に奉仕する作家像には市場への意識が紛れ込む。言いかえれば、「公衆」という不可視の視線の下でのパフォーマンスな振る舞いが、ブラウンの政治社会的論説に影響を与えた可能性は否定できないのである。その姿勢は、常に他者に向けて「書く」ということが前景化されていたブラウンの書簡体小説と同じ構図

を有している。

彼はこのような社会的要請の下で、ペンの権能を遺憾なくふるう作家としての欲望とその言葉に囚われる不安の間を揺れ動く。ペンの権能と作家の立場という視点からみた時、批評雑誌におけるブラウンの姿は、クララの不安やマーヴィン複雑な戦略と重なることになる。書くことへの言及が多くみられる『アーサー・マーヴィン』には、次のような語り手の論述がある。

Books are cold, jejune, vexatious in their sparingness of information at one time, and their impertinent loquacity at another. Besides, all they chuse to give, they give at once; they allow no questions; offer no further explanations, and bend not to the caprices of our curiosity. They talk to us behind a screen. (619)

本がメディアの独占的な地位を占める時代にあって、ブラウンは本および書記言語が抱える限界を見事に捉えつつ、それを利用する。「本はスクリーンの後ろから我々に話しかける」というマーヴィンの皮肉は、マーヴィンだけでなくブラウン自身が身を寄せる限界でもある。クララを追い詰めつつも最終的に救い、マーヴィンの隠れ家を創りだしたペンの力は、文字化された「作家ブラウン」にとって、自分の存在を格納する「避難場所」であった。しかし、その場所は、クララにとっての「避難場所」が言葉に病的にとらわれる異質な空間へと変貌したように、アメリカ最初の職業作家になることを目指したこの若者が常に不安を抱え込む場所でもあったのである。

《注》

- (1) Scott Slawinski によれば、ブラウンの批評雑誌は男性をその想定読者としている。これは、女性を読者として想定した当時の小説執筆とは異なった態度を要求する。

Charles Brockden Brown's *Monthly Magazine and American Review* contained little that was of compelling interest to women or that was immediately relevant to their lives, and the repeatedly unsympathetic portraits of women suggest that Brown might have aimed to discourage women readers. (39)

この指摘に従えば、ブラウンの女性読者への厳しい論調は、本論で後述するように、男性読者の視線の下でなされたパフォーマンスな色彩を帯びることに

なる。

- (2) 20世紀以降の批評においても、この評価は変わっていない。Donald A. Ringeは「このクララの問題の幸福な解決——ブラウンが出版直前におそらく書いた最終章としてつけられたもの——は、全く満足できない」(23)と評している。
- (3) 戯曲性への言及はブラウンの小説に多くみられる。たとえば、『エドガー・ハントリー』の語り手エドガーはその冒頭で、過去を振り返り、「劇はついに半ばまで終りをむかえました」(5)と述べる。『オーモンド』では宇宙機械論者オーモンドは「嘆かわしい情景だ！ しかし、大きな規模でみれば、宇宙はそれ以外の何だというのだ。自然は苦しみの劇場ではないか」(171)と述べ、一方でこの小説の語り手Sophiaは自分を紹介する際に、「舞台上で私の紹介をすることをお許しを頂かねばなりません」(224)という但し書きから自分について話し始める。『ウィーランド』ではクララが悪漢Carwinに始めて言及するとき、憎しみをこめて次のように言う。

Let me stifle the agonies that were awakened by thy[Carwin's] name...

Let me tear myself from contemplation of the evils of which it is but too certain that thou was the author, and limit my view to those harmless appearances which attended at thy entrance on the stage. (*Wieland* 46)

ブラウンの語り手や登場人物は自らを舞台の上の人物として捉える。その舞台の上では、上記の引用に見られるように、内実を保証しない外面性のみが頻繁に強調される。

- (4) 批評雑誌も研究範囲に収めるブラウン研究にとって、保守的言説を展開するブラウンとゴシック小説家ブラウンの調停は、不可避の問題になっている。多くの考察はブラウンの読者への信頼を問題解決の鍵とする。Frank Shuffeltonは、ブラウンが読者の美学判断力に信頼を寄せていたと論じる。そして、ブラウンにとって、批評雑誌は、「市民的読者」(110)が判断力を相互に確認するためのフォーラムであったと論じる。こうした考察は、たとえ扇情的な描写に直面したとしても読者は平静を保てるのだという楽観的帰結に至る。しかしMichael Codyの考察など、明らかな問題を抱えている考察も多いと言わざるを得ない。

Brown, I argue, rightly focuses on the reader and her or his motives for taking up the book. To read well written tales full of murders is not to the reader's disadvantage if the reading is, as he says, for amusement only. The active mind that reads for ideas will leave a book if there are no ideas to be found in it; moreover, the good reader — although necessarily influenced by the content of the text and, by extension, the mind of the author — is largely in control of the reading situation once the book is out of the hands of author and publisher. Understood in this context, Brown seems to have had an innate understanding of the role of the reader in the republic of letters. (117)

コーディの研究は、読者に対するブラウンの信頼に全てを賭ける。しかし、コーディの議論は、ブラウンが「良い読者」への信頼をどのように、どの程度確保していたか一切論証していない。さらにこの研究は、ブラウンが殺人描写を含むテ

クストを「良く書けた話」と断じたことはない事実を無視し、さらに、最後の結論——「自然やコモン・センスからのあらゆる逸脱と同じように、現在の流儀が短期間しか君臨しないことを望む」という言明——を意図的に削除するなど、多くの点で問題を含んでいる。

引用文献

- Brown, Charles Brockden. *Arthur Mervyn; or, Memoirs of the Year 1793*. 1799-1800. Kent: Kent State UP, 1980. Vol. 3 of *The Novels and Related Works of Charles Brockden Brown* Ed. Sydney J. Krause et al. 6 vols. 1977-1987.
- . *Edgar Huntly; or, Memoirs of a Sleep-Walker*. 1799. Kent: Kent State UP, 1984. Vol. 4 of *The Novels and Related Works of Charles Brockden Brown* Ed. Sydney J. Krause et al. 6 vols. 1977-1987.
- . *Literary Essays and Reviews*. Ed. Alfred Weber et al. Frankfurt: Peter Lang, 1992.
- . *Ormond; or, the Secret Witness*. 1799. Kent: Kent State UP, 1982. Vol. 2 of *The Novels and Related Works of Charles Brockden Brown* Ed. Sydney J. Krause et al. 6 vols. 1977-1987.
- . *Wieland; or, the Transformation. An American Tale*. 1798. Kent: Kent State UP, 1977. Vol. 1 of *The Novels and Related Works of Charles Brockden Brown* Ed. Sydney J. Krause et al. 6 Vols. 1977-1987.
- Charvat, William. *The Origins of American Critical Thought 1810-1835*. 1936; rpt. New York: Russell, 1968.
- Christophersen, Bill. *The Apparition in the Glass: Charles Brockden Brown's American Gothic*. Athens: The U of Georgia P, 1993.
- Cicero, Marcus Tullius. *De Natura Decorum and Academica*. Trans. H. Rackham. Cambridge: Harvard UP, 1933.
- Cody, Michael. *Charles Brockden Brown and the Literary Magazine: Cultural Journalism in the Early American Republic*. Jefferson: McFarland and Company, Inc, 2004.
- Goddu, Teresa A. *Gothic America: Narrative, History, and Nation*. New York: Columbia UP, 1997.
- Court, Franklin E. *The Scottish Connection: The Rise of English Literary Study in Early America*. Syracuse: Syracuse UP, 2001.
- Dunlap, William. *Memoirs of Charles Brockden Brown: The American Novelist, with Selections from His Original Letters and Miscellaneous Writings*. London: Henry Colburn and Co, 1822.
- Grabo, Norman. *The Coincidental Art of Charles Brockden Brown*. Chapel Hill: The U of North Caroline P, 1981.
- . "Historical Essays." *Arthur Mervyn; or Memoirs of the Year 1793*. 1799-1800. Kent: Kent State UP, 1980. Vol. 3 of *The Novels and Related Works of*

- Charles Brockden Brown Ed. Sydney J. Krause et al. 449-477
- Hinds, Elizabeth Jane Wall. *Private Property: Charles Brockden Brown's Gendered Economics of Virtue*. Newark: U of Delaware P, 1997.
- Kittler, Friedrich A. *Discourse Networks 1800/1900*. Trans. Michael Metter and Chris Cullens. Stanford: Stanford UP, 1990.
- . *Gramophone, Film, Typewriter*. Trans. Geoffrey Winthrop-Young and Michael Wutz. Stanford: Stanford UP, 1999.
- . *Literature, Media, Information Systems: Essays*. Ed. John Johnston. Amsterdam: G+B Arts International, 1997.
- Morson, Gary Saul. *Narrative and Freedom: The Shadows of Time*. New Haven: Yale UP, 1994.
- Rice, Grantland S. *The Transformation of Authorship in America*. Chicago: The U of Chicago P, 1997.
- Ringe, Donald A. *Charles Brockden Brown*. Rev. ed. Boston: Twayne, 1991.
- Rosenthal, Bernard. "The Voices of *Wieland*" *Critical Essays on Charles Brockden Brown*. Ed. Bernard Rosenthal. Boston: G. K. Hall, 1981.
- Shuffelton, Frank. "Juries of the Common Reader: Crime and Judgment in the Novels of Charles Brockden Brown." *Revising Charles Brockden Brown: Culture, Politics and Sexuality in the Early Republic*. Ed. Philip Barnard et al. Knoxville: The U of Tennessee P, 2004. 88-114.
- Slawinski, Scott. *Validating Bachelorhood: Audience, Patriarchy, and Charles Brockden Brown's Editorship of the Monthly Magazine and American Review*. New York: Routledge, 2005.
- Stiegler, Bernard. *Technics and Time 2: Disorientation*. Trans. Stephen Barker. Stanford: Stanford UP, 2009.
- Waldstreicher, David. *In the Midst of Perpetual Fetes: The Making of American Nationalism, 1776-1820*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1997.